



神戸山岳会 月報

昭和54年4月1日

No.86



昭和54年1月 天狗原

植神上三幸田萩大広国大星矢堀
原田原浦内中本下澤沢川野木田

発行 神戸山岳会
神戸市生田区中山手通1丁目105の9 前田方
編集 星野・植原

原稿提出先

植原清明 〒676-01 高砂市阿弥陀町阿弥陀 1269 の1

星野辰也 〒655 神戸市垂水区塩屋町平尾19 川重寮

＝ 目 次 ＝

新年会報告	萩本 維都子	1
昭和53年度冬山合宿報告		2
序 文	星野 辰也	2
合宿計画	星野 辰也	2
行動記録	上原正記・萩本維都子	3
装備係として	矢木 研三	5
食料係として	神田 章吉	6
気象係として	広澤 富江	8
医療係として	萩本 維都子	9
冬山合宿に参加して	国沢 明美	10
冬山合宿	木下 澄子	11
食料担当（驚く瞬間を多く造りたい）	大川 綾子	12
冬山合宿	堀田 久	13
大雪（だいせつ）	神田 章吉	14
シユラフの中で思う（S54年元旦）	萩本 維都子	16
合宿雑感（現代新人気質）	梅ノ森の青鬼	17
冬山雑感	植原 清明	18
個人山行		
氷ノ山スキーツアー（ぶん回しコース）	木下 澄子	20
氷ノ山	国沢 明美	21
塩見岳敗退	星野 辰也	22
仙丈岳	萩本 維都子	23
我が故郷の山々（その1） 浅間山	星野 辰也	25
我が故郷の山々（その2） 四阿山	星野 辰也	26
白馬岳主稜	植原 清明	27
石鎚山	幸内 義孝	28
例会報告		29
編集後記（付録 岩登り・その墜落の恐怖）		31

新年会報告

昭和54年の新年会は下記のように行われました。

日 時 1月20日 午後7:00より
場 所 コトブキビル寿里庵
会 費 5,000円
参加者 26名

前田浩、木村寅次郎、島田文雄、片山英一、大塚正之、岡田政一、新川利夫
岸本光弘、野上芳宏、藤本卓民、岡崎群治、三宅信道、内藤正司、幸内義孝
国沢明美、大川綾子、大下澄子、広澤富江、堀田 久、植原清明、三浦靖男
神田章吉、矢木研三、上原正記、田中亨三、萩本維都子 (敬称略)

例年通り前田宅で行う予定でしたが、いつも御迷惑ばかりおかけするのも、申し訳ないとのことから、今年はどこか違う所で、趣向をかえてやろうということになりました。

会費、5,000円は現役に取って、何とも痛い事でしたが、皆、のんで、のんで、のまれてのんで-----酒代のため集めた会費などは、ふっ飛んでしまいました。(特級にしたのがまちがいかも。今度からは一級にしよう。)岸本さんやその他OBの方々からのカンパで何とか乗りきり、楽しい酒盛りに終わりました。----- 神戸アルコールクラブ報告

しかし何といっても最大のトピックスは山口さんが全快して元気な顔を見せて下さった事です。かもしかのような足で、すらりと立っておられました。なんだかとてもうれしくて、皆んなでホット胸をなでました。

二次会は北野のエルヴィノに行きました。そこで野上芳宏さんが、カルメンを踊られました。が、岩場での身の軽さも、舞台の上ではみのらず、おかしくて、おかしくて---。アンザイレンして、確保してさしあげたら、もう少しうまく踊れたかも知れません。

記 萩本

昭和53年度冬山合宿報告

序 文

今年度は積極的な新人募集活動を行い、男女共多数の新人が入会しました。その為これら多くの新人に冬山の極めて初歩的な技術とそしてなによりも山での生活技術を習得してもらうことを目的として、今回の冬山合宿が計画されました。参加メンバーは総勢14名(内女子5名)と、最近の合宿では最大の人数となり、なにはともあれ頭数だけは揃ったという次第であります。これら多数の新人に雪山生活の楽しさ、厳しさ(これは結果的にかなり疑問であった。)を味える所として樽池を候補地に選定した。また最近山岳スキーが見直されつつある状況を鑑み、雪山での積極的スキーの利用ということも、今回我々が目的とした一つでもある。

中堅メンバーにはかなりもの足りなさを感じさせたかも知れぬが、それは以後の個人山行で燃焼させてもらうものとして、新人諸君にはそれなりに冬山も味わっていただいたことと思い、この報告書をまとめてみました。(文責 星野)

合 宿 計 画

目 的 新人の冬山生活体験と山岳スキー技術の習得

期 間 12月30～1月5日(内2日間予備日)

行動予定

12月30日	白馬駅 — 樽池スキー場 — 成城大ヒュッテ付近のBC設営
12月31日	BC — 天狗原付近雪上訓練及びスキー、後発隊入山
1月1日	同 上
1月2日	同 上
1月3日	BC — 樽池スキー場 — 帰神
1月4日	予備日
1月5日	予備日

参加メンバー

三浦(C.L.), 幸内(S.L.・装備), 星野(S.L.), 神田(食料), 上原(記録), 矢木(装備), 萩本(会計・医療), 大下(食料), 大川(食料), 国沢(食料), 広澤(渉

外・気象), 堀田(装備), 植原, 田中

装備計画

共同装備の主なものとしては、BC用大型カマボコテント1張、ウインパー1張、ツェルト3人用2張、炊事用具、コンロ4台、石油10ℓ、それにスキー修理用具1式があげられる。

個人装備としては、スキー用具1式と一般的な冬山装備1式である。もちろん極力軽量化を計ったことは云うまでもない。

食料計画

食料は積極的にペミカンの利用を計り重量の軽減、調理時間の短縮をねらった。14人分の総重量は約32kgである。米は1人3合とし残りはα米、ラーメン、もち等を用いた。

その他

上記の考慮により、共同装備および食料を含めた各自の重量は男子6kg、女子4kgと冬山合宿としてはかなり軽量化された。又新人が多数の為入山前に4回程、ミーティングを行いスキー用具、冬山装備等の選定基準や使用方法の細かいアドバイスを行った。

最近冬山でのゴミ問題が大きくクローズアップされてきているので、ゴミの処理方法も十分考慮する必要があった。

(文責 星野)

行 動 記 録

上 原 正 記

A班 三浦、幸内、星野、神田、上原、矢木、大下、大川、国沢、広澤、堀田

12月30日(雪)

白馬(5:05) — 親の原(7:30) — 馬の背(11:10) — 成城大小屋(14:30)

前日より降り続く雪にむかえられ、我々は電車を降りる。暗闇の中、2台のタクシーに乗って、親の原へ車を走らせる。しかし、車は走らない。行手を遮るものは、な、なんと雪で道路が、すっぽりと雪で被われている。1時間ほど車で走って、無事に親の原へ着くここで身仕度をする。色とりどりのヤッケに身を包むと一見、ベテランの山ヤ、しかし、その実態は-----

親の原からリフトで馬の背へ、核心部(リフト)を無事にやり過ぐすと、林道だ。林道に出てから成城大小屋までは、なだらかな勾配が続いたので調子よく進めた。

成城大小屋の軒端をかりてテント設営。

12月31日

雪上訓練(ラッセル)(9:00-10:00) BC(10:00)-天狗原(13:30)

雪上訓練(滑落)(13:30-15:00) 天狗原(15:00)-BC(17:00)

天狗原へ雪上訓練に出かける。途中、色々トラブルがあり3時間30分かかってやっとたどりついた。天狗原では、ザイルを使って確保の仕方、ピッケルで滑落した時の止り方について教えてもらった。

天狗原からBCまで、スキーで滑って降りる。途中、林の中を通る時、思うように滑れない。滑ってはころんで、ころんでは滑ってやっとBCまで降りた。

BCでは、植原さんと田中さん、そして萩本さんが来ていた。

1月1日

BC(9:00)-天狗原(10:30)-乗鞍(12:00)-天狗原(12:45)-BC(14:30)

昨日、天狗原まで3時間30分かかったが、今日は1時間30分で少しおつりがきた。これは練習のたまもの、それともビンディングの調整がうまくいったからかな?

天狗原から乗鞍岳の登りは傾斜がきついので、途中スキーをかついで登った。頂上へ着くと囲りはガスでつまれて、何も見えず-----残念だ。ひと休みしてからスキーを付け天狗原まで直滑降で下りようと思ったが、止り方に自信がないのでしかたなく、斜滑降で滑る事にした。

♪ 青いジャケットが、純白な雪原をかけぬける。僕のシュプールは、途中切れ切れだった。

天狗原までなんとか降りて、全員で写真を撮り、BCへの道をいそいだ。

1月2日

BCでスキーの練習(8:30-16:00)

BC横の斜面でスキーの基礎練習。まず、ゲレンデ作りから始まる。30分ほどでみごとな特設コースが出来た。三浦さんがコーチとなり1日中スキーの練習。皆さんスキーがうまくびっくりした。

1月3日(快晴)

BC撤収

成城大小屋(8:10)-親の原(12:30)-白馬大池(14:30)-大阪(21:50)

空は雲ひとつなく、遠くの山々がはっきりと見える。白馬、乗鞍の山膚に朝日があたると雪が金色に輝き僕の目につき刺さる。まぶしさのあまり目をつぶる。すると、まぶたの裏で雪の色が黒く写る。岩が白く、写真のネガを見ているように。

さあ、出発! ザックを背負い一路親の原へ。原生林をぬって林道を滑る。途中、阪大ヒュッテ、早大ヒュッテが雪の中に建っていた。林道では、スキーの醍醐味を十分味わう事が出来

だが、梅池スキー場のゲレンデではちょっと苦しかった。林道では、軽やかに滑りゲレンデでは、ぎこちなく、そして無格好に斜滑降で-----親の原までなんとかと無事に降りました。

B班 植原、田中、萩本 萩本 維都子
12月31日 白馬駅着(5:45) ———— 親の原スキー場(7:00) ———— 最終リフト下車
(9:00) ———— ベーステント着(14:00)

師走の朝の5時45分、うす暗い白馬の駅に、何となく眠むような背の高い男と、まるまっ
ちい男と、清楚な美しい女の3人が降り立った。バスやタクシーを待つ大勢の人達を横目で見
ながら、私達はタクシーを予約してあるからとあせりもせず、観光案内所に行って問い合わせ
てみた所、びっくり、何と予約は聞いていませんとの返事。困ったなと思っていると、そこ
のおじさんが別のタクシーを呼んで下さったので、登山計画書を書き、感謝して親の原スキー場
に向う。東急山荘の近くまでタクシーが入ってくれたので、1時間程、朝食を取ったりして休
み、8時からリフトを3台乗りつぎ、難なく今回合宿の核心部をスムーズに通過する。9時、
最終リフトを降りた後、スキーをつける。とたんに3人の心の中に、すべりたいという強い欲
求が生まれ、上の林道に続く道が見えていたにもかかわらず、ゲレンデを下まですべってしまった。
まあここからでも林道ははっきり見えているし、つながっているから行けるだろうと思っ
たのが、大きなまちがい。ヘアピンカーブの林道をラッセルするはめになり、2時間のロスタ
イムが生じてしまった。でも空は青く、雪はまっ白、人は誰れもないし、静かだ。3人でな
んだかんだと言いながらラッセルしていると、まことにのんびりしていて、それはそれで楽し
いものだった。この間に迎えに来て下さった星野さんと、行き違いになったらしい。いつもの
ことながら、どうもすみませんでした。2時近く、やっと成城大ヒュッテのとなりの、我なつ
かしのKACのテントに到着。3人共少々バテぎみでホットした。

装 備 係 と し て

矢 木 研 三

人員数とルートから見て最も効率のよいリストを作成し少しでも軽量化を図るとともに万全
を期さねばならぬのが装備であるが、新人が冬山で初歩的な生活技術を身につける事を最大の
目的として計画された今回の合宿は、参加者の数も14人と多く、幕営に使用するテントはこ
れだけの人員を収容でき、食事の時あるいはミーティング等に全員が顔を合すことが出来るス
ペースの確保と今迄軽量化された吊天での幕営の経験しか無い者に、冬季の基本的な幕営技術

を経験させる事を意図してウインパーとカム天を使用する事になる。今回の合宿はスキー技術の習得も目的の一つにあげられ、個人装備にスキーが加わったので、使用するスキーのビンディングにはカカトが上がるのはもちろん、なるべくSafety機構を有するものを取り付けるようアドバイスする。装備点検で天幕の破損個所の修理、張り網の交換等は出発迄に終わってなんら問題なかったが、コンロに付いては不備な点を修理後の点検の不徹底から完全に直さぬままに山行に持参、4台のコンロで使用出来なかったものが1台、使用出来たもののガスの漏れがあったのが1台と、どうかすると山行そのものを不能にする要素をかかえていた事は無事に山行を終えた今も深く反省する所である。コンロとあわせて燃料についても4日間で4台のコンロを満タンと10ℓでは今回の山行の様に恵まれすぎた天候で過不足なかったと言うことは、悪天候に見舞われていれば不足していたという事になる。もう少し突込んだ考査が必要であったと反省している。生活用具でテント以外で記述しようと思うものにスコップと除雪タワシがある。2丁のスコップの内1丁は柄がサシ込み式であったがこれは使用中に柄が抜けて役に立たなかったのでネジで固定するものに変える必要があろう。除雪タワシは装備表作成時には、テント1張りに2ヶの計4ヶとなっていたが実際には2ヶ用意しただけですませたが大変不便だったのと機能的には木部の付いた馬ブラシなどの方が良かった様に思える。今回個人装備としてシュラフ・カバーにゴアテックスで作ったものを持参、巷間いわれる所の真偽を正すべくテストした所、事実シュラフ内部のヌレる事は無かったがファスナーの部分が凍結して動きが悪くなったので比の部分ヒモでしめる様に改めたものであれば多少ゴアゴアするのと高価な事を除けば長期間の冬山での生活もシュラフがヌレる事も無く快適に過せそうである。最後に、今後の合宿に是非持参したいものにゴミを持ち帰る為のしっかりした袋がある事を記しておきたい。

食料係として

神田章吉

ベースをおいてのスキー合宿とはいえ、アプローチのことを考え、極力軽量化に努めた。

＜S53年度冬山合宿食料表＞（14人分）

	朝	昼	夜
30日	弁当	弁当	〈ジンギスカン〉 米(9合)、ラム肉(600g) キャベツ(1)、玉ねぎ(6) ピーマン(1袋)、タレ(1)

31日	〈たきこみごはん〉 ㊦米(5袋) たきこみの素(3) みそ汁の素(11袋)	[1人4回分の食料] ラスク(2袋) ビスコ(2) ギンビス(1)	〈コーンスープ〉 米(11合)、コーンスープ の素(14人分)、ペミカンA
1日	〈雑煮〉 もち(42)、うすあげ (2)、ジフィーズニ ンジン(1袋)、青 菜(1袋)、みそしる の素(20袋)	[14人分4回分の食料] チーズ(1) ソーセージ(1) ピーナツ(2袋) 甘納豆(4袋) ゼリー(4袋)	〈豚汁〉 米(15合) ペミカンA
2日	〈ラーメン〉 ラーメン(14人分) ペミカンB	チョコ(4袋) アメ(2袋) 干しリンゴ(4袋)	〈カレーチャハン〉 ㊦米(10袋)、カレー粉 (12人分)、ペミカンA
3日	〈たきこみごはん〉 31日に同じ		〈予備食〉 ホットケーキ(2袋)、米 (11合)、バター(1)

ペミカンA----豚肉(600g)、じゃがいも(6)、玉ねぎ(6)、ニンジン(1)

ペミカンB----ペミカンAの半分

計32kg(ペミカンにしての重量、米も含める)

- 雑煮と、ジンギスカン以外は、すべてペミカンを使用した。
- 夕食だけは、価格の点を考え、㊦米にはしなかった。
- ペミカンの内容物を、ペミカンAとBの2つに統一して、煩雑を避けた。

〈合宿後の反省〉



好評 カレーチャーハン(元コック長の三浦氏の指導があつてか?とぶように売れる)
 コーンスープ(とろける味が、たまらな〜い)
 パイン、リンゴの干したもの(甘くて、元気がつきました)
 ギンビス(星野氏推せん、塩味が、疲れた体にピリリとききました)

不評 コンソメ用に、生のタマネギを一つぐらい用意しておいた方がいい。



超過 砂糖は1.5kgもっていったが、1kgも使用しなかった。

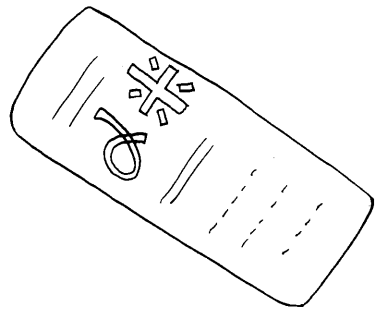
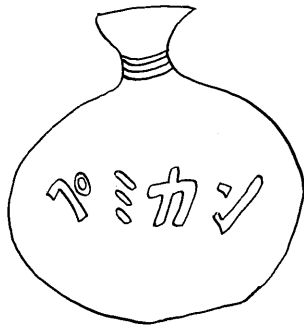
紅茶2パックであったが、使用したのは、1パック

不足 塩は、フィルムケースに1本のみ(ペミカンに含有のため。)3~4本は、いった。

行動食が、少なかったのでは。(各自で不足分を持ってきてもらうつもりであったのですが)

その他

- 酒を、あとで買い出したものをふくめて6~7本飲んだが、ベースからおろすのに苦労した。やはりポリタンで持って上がるべきではなかろうか。



気象係として

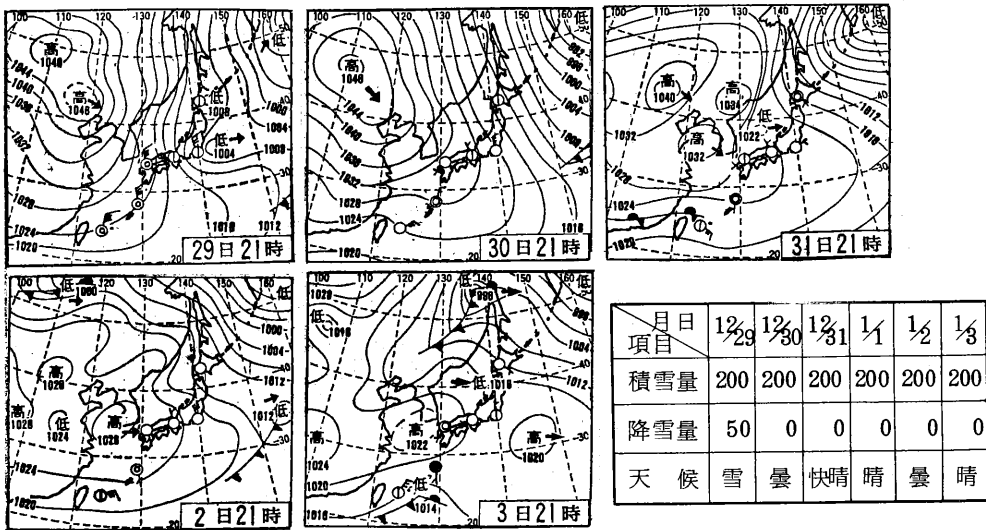
広澤富江

今年の冬は数字のうえから、「五十年か百年に一度のおかしな冬」という記録づくめの暖冬の中、冬山合宿が実施された。新人を対象とした今回の合宿に参加出来ると決まったのは、12月の声を聞いて間もなくのこと、冬の最中、しかも信州方面というたくさん、たくさん雪の降る山へ行くのは生まれて初めての事なので、頭のとっぺんから足の先まで装備をそろえるのに、てんやわんやの毎日が続き、何かしらすべてに準備不足の気分のまま出発日を迎えた。そして先輩達の凄まじいばかりの冬山体験を聞くにつれ、ことに寒さに対する不安・恐怖感はいずれも毎日に増幅してゆき、果たして私の体はどんな状態まで耐えられるのかしら。しかし、そのどんな状態というのも経験がないのでわからず、全く考える余地もなくガン宣告をうけた患者の如

き心境だった。そういう心配をよそに異常気象のせい、町中はポカポカと暖かく、スキー場
 日よりではX印が目立っており、少しは緊迫感もほどけた気分だ。

下記に入山中の天気図と梅池辺りの天候状態をまとめましたが、雪が大量に降ったのは12月
 29日だけで、あとはチラチラと舞う程度。冷え込みの方は30日の夜が最高で、寝袋に体をつつ
 んでいても手足がしびれてくるようだし、又テントをたたく風音が不気味で一睡もしていない。
 翌日からはさわやかな青空の見える日もあり、思っていた程寒さに苦しめられる事なく下山で
 きた。

史上最高といわれたこの冬の暖かさの原因は、シベリア高気圧が例年ほど南下せず、寒気も
 弱かった為だそうで、その影響で大変天候に恵まれた合宿生活を終わることが出来ました。



医療係として

萩本 維都子

今回、共同装備として揃えようということに決まり、6,150円の大金をはたいて、最底一
 通りのものを揃えました。合宿の時は共同装備で行けるものの、個人山行では各自の持病薬程
 度の携帯に終わってしまう。その度に、共同装備の中から出し入れするのは、なかなかめんど
 くさいし、年2回の合宿のためにだけ揃えるのも出費がかさみ、薬の有効期限内内服薬で約3
 年、外用薬は消耗品的な所もあり、管理がむづかしい。けれども「そなえあれば、憂いなし」
 のたとえ通り、やはりそなえておくべき物であり、又なにもなければ全く役に立たず、重いだ
 けです。そして大部分の医薬品が使われないまま使用期限をむかえてしまいます。この点の
 かねあいが一番の問題点だと思いますが、結局、医薬品にたよらない山行を心がけ、日頃の不節

制を改め、強い肉体を作ることの方がずっと手取り早く、重要なことのように思います。

今回、医療係として私の行った事は、ただ医薬品を購入しただけにすぎませんが、本来、医療係というのは骨接の際の外的な応急措置とか、盲腸など発熱性疾患時の内的な応急措置等が出てこそ、その任務を果せるのではないのでしょうか。そう言った方面の知識にあまりに乏しい自分を恥じ、これからはそういう点も学んで行こうと思い、反省にかえさせていただきます。

以下、今回購入した医薬品をリストアップしてみました。

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 〈内服薬〉 | ○ ビタミン剤 アリナミンA25、グロンサン錠 |
| ○ 鎮痛解熱剤 | ○ トローチ アクロマイシントローチ |
| （非ピリン系）ノーシン、アスピリン | ヴィックスドロップ |
| （ピリン系）セデスーG | ○ 目薬 マイティア |
| ○ 消炎鎮痛剤 — 扁桃腺炎、歯肉炎等 | 〈外用薬〉 |
| ポンタール（250mg） | 外傷薬 パイロール、メンソレータム |
| ○ 抗生物質 — 感せん症、発熱性疾患等 | 化膿止 ドルマイシン軟膏 |
| シグママイシン（250mg） | 止血剤 ホルムス散 |
| ○ カゼ薬 | 消炎血行促進剤（凍傷用）ヘパリンZ |
| （非ピリン系）ルルゴールドA錠 | シップ薬 サロンシップ |
| ○ 胃腸薬 | 皮膚消毒綿 アメジストA、アクリガーゼ |
| （消化剤）タケダ胃腸薬、マルチパン | バンドエイド — フリーサイズのもの |
| （鎮痛剤）ブスコパン | ガーゼ、ホータイ、圧縮綿、紙バン、三角布 |
| ○ 整腸下痢止 | その他、肩こり用 — 点温膏 |
| ワカ末F錠 | |
| ○ 便秘薬 ビオン錠 | |

冬山合宿に参加して

国 沢 昭 美

大阪駅の中央コンコースは、お正月を冬山やスキーで過ごす人々で溢れていて、いつもながらの活気に満ちていました。神戸山岳会の冬山合宿先発隊11人のメンバーの顔にも、一様に明るい笑顔と軽い興奮がみなぎっていて、私はその中にひたりながら、合宿に入会以来初めて参加することが出来た喜びでいっぱいでした。今回のような山行から、冬山を始めることが出来て、私のような冬山未経験者にとっては、大変恵まれていたと思います。天候にも恵まれて、

大自然の猛威にふれることなく、温かさのみにふれた山行でした。5日間をふり返ってみて、非常に多くのことを学び、そして反省させられました。初めての経験とはいえ、行動にまごつきと、準備の遅さが目立つ等、今、考えてみると自分としては、満足とはいへない山行でしたが、雪山での基本的な生活技術を肌で知ることが出来たという点では、とても満足しています。

今回の合宿は、スキーが主体でしたが、初めての山スキーで、ゲレンデスキーでは味わうことの出来ない良さを知りました。腕が腕なので、大きな口はたゞけません、大自然の中を思う存分滑れたら、どんなに楽しいことでしょう。三浦スキースクールのレッスンのかいもなく、滑る方はもう一つでしたが、シールをつけての登りは、大分うまくなりました。それでも下山日、白銀の後立山連峰を眺めながら、何とか無事、親ノ原のスキー場まで降りて来た時は気分爽快、最高でした。

食当、女その1/5としては、二つのテントの相違点をあげたいと思います。カマテンの不潔度は、日が過つにしたがってひどくなっていました。下山日の前夜、ウインパーの方で寝た時は、寒さは別として、どこかの別荘にいるのではないかと思いました。大人数であったせいかも知れませんが、食当として、もっと気を使うべきだったと思います。食器に関しても、ペーパーの不足で、ずい分ひどい食器もありました。これらの細い点にも少し気を配れば、もっと快適なテント生活が出来たでしょう。

合宿の体験を生かして、これからも一步一步頑張っていきたいと思っています。

冬 山 合 宿

大 下 澄 子

初めての冬山で、話にいろいろ聞いていたため(驚かされていた感もあり)、とにかく行く前にいろいろ考えすぎてまず疲れたみたいです。出発前は、何しろまず寒さに対して恐れている、どれくらい寒いかが自分自身でわからないということに対して一番不安でした。それでも“雪山”ということばに憧れ、ぜひ行きたいと思い出発しました。リフトを乗り継いで行って降りてから、シールをつけている時、手の冷たさを感じ、シールをつけて深い雪の中を登り始め、小休止の時、ワカンで登っている人が休んでいる姿を見てなんか雪の中に埋まってすごくしんどそうにして休んでいるのを見たり、最初の夜、寒くて寝られず朝シュラフの上に雪が積っているのを見た時が、ほんとうに雪山に来たという実感でした。シールをつけての登高の仕方、ダブルヤッケの着方、ロングスパッツのつけ方、ワカンのはき方、雪から水を作ること e t c. の実際を経験したということが、何よりの今回の冬山合宿での大きな収穫でした。そ

してゲレンデでのスキーじゃなくて、うわさに聞いていた山スキーなるものが経験出来てとても嬉しい。これがほんとうのスキーの本来の姿である様に思いました。大自然の中を自由に、作られた、限られた区切りの中をすべらされるのではなく、正に自分自身で道をすべる楽しさがあり、色々に景色が変わっていく中をすべって(ころんで)、とても楽しかった。

食料担当 (驚く瞬間を多く造りたい)

大川綾子

まず初めに感謝したい事は、冬山初心者が半数近くあり、その為、先輩の方々が多分に配慮して下さいの結果冬山合宿が樽池に決まった事。はじめてとは言え山スキーも兼ねて参加出来た事は、私にとって大変な驚きと共に進歩しつつ、冬山で生活すると言うことは山の何につなげて行くのか、その原点をリーダーはじめ多くの経験をもつ方々から見せてもらった。

9:30分大阪発(ちくま)野島さん萩本さんのファイトある言葉の見送りで勇気づけられる。スキー道具を目の前にして不安な気持が増す中で、ビール、ワイン、手作りフライポテトが飛びかい三浦、星野、幸内さんのデリカシーソフトな一面を見てはっとする。そしてにぎやかな大家族である。

5:50分白馬着、電車を下りると足下の白さが目にしみる。薄明の中で電車の通り過ぎたホームは、雪景色独特の雰囲気がかげ、ぼんやりと時間が止って行くようである。

タクシーとリフトを乗り継ぎ樽池へ、シールをつけて歩き方、重心のかかる所を習う。思ったより歩きやすく楽しいものと分る。楽しいツアー気分で成城大ヒュッテに着いた。

翌朝、新雪に囲まれた気分は最高に楽しい。ワカンをつけラッセルなどの練習は大変なエネルギーを必要とする。天狗原に登る途中リーダーより、ターンを習う、空青く心はずむ気分です。頂上に着いた。祠の所で記念写真を取る。これより我々テントに向って下る。最初から慎重に、3回ターンを過ぎてから前方の神田、幸内さんの危機の知らせも間に合わず、ふんわり気分よく飛んだ次の瞬間、ズシーンと顔面追突、トンボ返り、目の前真暗、起きる前にガックリ腰を抜かす、自信喪失のはじまり。神田さんはとても優しい人です。あめ玉1万個前渡しせねばならぬほど大変お世話になりました。そして日は暮れて足が見えないころ無事テントに着き、足はガクガクです。1杯の紅茶を持って萩本さんが迎えてくれた時は空の星がにじんで見えた。

樽池を下る日が来た。覚悟を決め、こける回数を数えながらスキーツアー。スキー場の中途過ぎからどう言う訳か私の仲間を、スキーヤー達をぐんーと追い抜いた。急に上達したのでしょうか?ゲレンデを飛んで飛んでまわるほどスピードが出た。その時の気分は満足、言うこと

なし、山スキーをやってみて大変な驚きの中にささやかな喜びを得ると言うことは非常に貴重なものでありました。

下界の生活とすっぱり切り離れた部分で必要とする所、頼れるのは自分の足である。テント生活をするのは出来るだけ清潔さを保つ事だと思ふ。テント内、外での準備、段取りの良し悪しでかなり時間が違ってくる。人から聞いたりする部分より多く疑問を残し、装備の点は自分に合った方法で改善せねばと思ふ、1つ1つ体験して行くしかない。

シュラフをぬらしてからはその冷めたさと寒さは、冷蔵庫の中にある眠れる美女も夜が明けまでの氷の世界である。理屈抜きに忍耐のいることの驚き百倍。

三浦さんの料理指導は、限られた食料の中で工夫すると大変に味のいいものが作れることを知る。たとえば今回のペミカンはこれを戻すとロードはどんな味になるのか、ビタミン不足の問題と、生野菜との違いなどいずれも長所、短所はあっても調味料の一味で軽量でおいしく食べれるものにペミカンは良いと思ふ。スープはマギーブイヨンの素に生の玉ねぎ、ニンジンを加えればバランスが取れる。大家族の食事は、雪を水に溶かす量から時間が必要とする為に、手早く出来て暖かくおいしく食べれるものが第1である。カレーチャーハンは味もよく体が暖まるので良い、たきこみご飯は手早く出来て味も良い。このようにおかずとご飯がいっしょになったものが暖かい間に食べることが出来るので食の進むもとなる。行動食にアーモンドは良かった。

おいしいものを食べさせてやりたいと思ふ人の気持と、おかずと、ご飯とがすぐにカラになってゆく様子は大変に活気があり何よりも一番おいしく食べた食事タイムである。

冬山合宿は天候にも恵まれ、いつもと違った人のぬくもりを感じさせるものがあり、驚く瞬間とは新鮮なものに思ふ。そしてそんな中で穏やかな正月を迎えた事は大変にうれしく思ふ。

冬 山 合 宿

堀 田 久

12月28日ついに念願の本場アルプスの雪山を踏める日がやってきた。ザックの中身はいつもと違う。全てが見慣れない登山用具ばかりだ。ピッケル、アイゼン、輪かんかって登山を志す者のピラミッドの頂点ともいうべきすごい山ヤの使う、登山のシンボルマークのような僕には無縁の存在と思っていた、いわば憧れの登山用具をこれから雪山の中で自分の手で自由に扱おうとしているのだと思うと、山岳会入会2ヶ月という早さでここまで来たというまるで階段を大まかで登るような心細さと、何かのスタートを切った時のような熱いものがミックスし

た不安定な気分だった。

あわただしく大阪からスキーヤーと登山客の混った何とも不思議な組み合わせの列車で遠い雪国へと暗い闇の中を向った。眠れるまま白馬駅に着き列車から降りた瞬間、僕をむかえたものは暗い空を風にあおられはげしく降る雪と冷氣だった。かって夏にこの地を訪れた時の風景は全くおもかげを残していない。「厳しい」これが雪国の第1印象だった。少し気をめいらしながらタクシーに乗り、その後リフトを乗り継ぎ山を登ったのだが、このあたり思っていた雪山のイメージと異っていたが、その時の自分にすれば、気をいっぱい張っていたのです。その後スキーを利用し、ベースキャンプを目的地に設営し、雪山での生活をスタートした訳だ。

合宿中、天気にも恵まれ、山スキーの練習、ラッセルのやり方など冬山の基礎からイグール造りに至るまで行い、何もかもが初体験の僕にとって全てプラスになり、また毎日の行事の夜のテント内でのおいしい夕食、楽しい会話などで1日の疲れをとほぐされるのを感じた。いつのまにか新年もむかえ合宿最後の朝、テントから出た時、今合宿で最初で最後について見た真青な涼しい空をバックに白銀の衣に包まれた後立山連峰を見つめた時が、本合宿で最も目に焼き付くシーンだった。白馬三山に五竜、鹿島槍も見える。雄大で美しい。言葉では表わせない大きな感動を胸いっぱい命のめまいの中でただ見つめた。静かな時間だった。涼しい早朝の風の中で彼らとなにかさわやかな会話をしたような気がする。素直な忘れられない時間だった。出発の声に我に返りパリパリのザックを背負い梅池までスキーでさっそうと下山する予定でしたが、結果は合宿も終わったのに滑落停止練習をしながら、スキーヤーの注目を一身に集め死ぬ思いで下山したという始末。その後、まさに「酒は百薬の長なり」ともいうべく、身にとけこむビールの酔とともに帰路へ向う列車に乗りこんで、一人手に握ったピッケルが少し黒ずみたくましく成った様を見つめつつ、自分もなんだか一回大きく成ったような満足感をおぼえながら、いつのまにか最近味わった事のない深い眠りについていた。

大 雪（だいせつ）

神 田 章 吉

大雪とは、何をかくそう我スキーの名前であります。もう、かれこれ6年目になります。ジブルレッターというしろもので、ぼくのドタグツを、あきもせずつけて、雪の上をのろのろと走ります。今は、もう傷だらけ。エッジのとめ金は、とれ-----。「この傷は、伊吹のスキー場で、メッチェンに、上をすべられてついたもの-----、それから-----。」と考えていくと、いろんな思い出が頭をよぎります。

おい、ボロスキー。

ボロスキーと言われて、くやしくないのかい。

君の友だちのストックは、2人目なのに、君は、まだ働いているのかい。

あんまり、無理すると、バラバラになっちゃうぞ。

あの氷ノ山では、さむかったな。雪洞の屋根って、つかれるだろう？

スイスイ、めずらしく、スイスイすべります。乗鞍の斜面は、パウダースノーです。大雪君も、しあわせを、全身で感じているようでした。

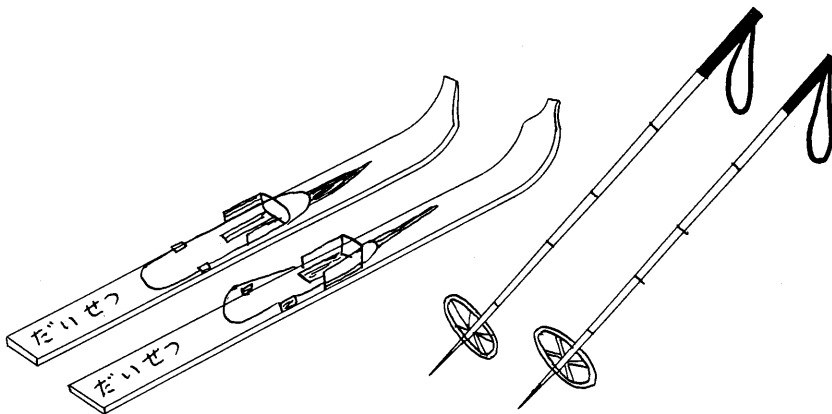
ギギギー、ギギギー、「おい、あんまり木の根っこに、ひっかかないでくれよ。」

「それに、おねがいだから、ジールのマスクの中に雪を入れないでね。」

さあ、大滑降がはじまりました。成城大ヒユッチから、クラストした斜面を、ソロリソロリと。鐘が鳴丘に入ったとたん、斜度が小さくなり、パラレルもどきに入ります。スキーヤーの目を意識します。シユッ、シユッ、シユッ（エッジをぬく時の音）

ますます快調にスピードを出し、ロッヂの前でとまろうとしたとたん、大雪君が、ぼくの足を、ひっぱりました。ぼくは、おしりから、ころびました。（そして、まわりを、きょろきょろ、「ああ、一番いいとこだったのに」）

そして、大雪君が、ぼくに、ニヤット笑って言いました。「油断大敵」



シュラフの中で思う (S 5 4 年元旦)

萩 本 維都子

冬山のテントの中でお正月を迎えるのは、22歳の時以来です。あの時は1日目が中の湯から徳沢まで歩きっぱなし、2日目が長堀尾根のきつい登りでグロッキー。大晦日の夜、シュラフの中で、「何で私はこんなにしんどい目をして、ここにいるの」と、悲しい気持ちでいっぱいでした。新しい年が明け、まばゆいばかりに白く輝く、雪と岩と氷の穂高岳が、するどく私の胸に飛び込んで来た時、ああ、これは本物なんだ、写真じゃないんだと思うと、涙があふれ、誰れにも気付かれずにいつまでも泣いていたかった事を覚えています。山へのあこがれだけでは、山に行けない事は知っています。アルピニストになるにはあまりに軟弱で、鉄の意志もなく、運の強い方でもありません。そんな自分だからこそ、山というきびしい道場できたえられる事が、必要なように思えるのです。そして山にいること、山の仲間と共に歩く事は、私の心の幸せです。私の一生、これは私一人で歩くものかも知れない。ひょっとしてどこかに物好きがもう一人いて、いっしょに歩いてくれるかも知れない。でも今の私には、どちらになるのかよくわかりません。ただ、はっきりわかっているのは、今は山に行けるという事です。

だから山に行きます。人生から逃げるのではなく、人生を心から愛しているから山に行きたいのです。最後に、KACの男達に、ささやかな抵抗をこめて、私の大好きな詩を送ります。

すべての山を登りなさい。	夢はあなたが与えるすべての愛情に必要です。
高いところ低いところをたずねあるき	あなたが生きているかぎり
すべての間道をたどり	あなたの人生の毎日は
知っているどんな小道もあるくのです。	すべての山に登ることです。
すべての山を登りなさい	すべての流れをわたり。
すべての流れをわたり	すべての虹を追って
すべての虹を追って	あなたの夢を見出しなさい。
あなたの夢を見出しなさい。	

(映画 サウンド・オブ・ミュージックより)

合宿雑感（現代新人氣質）

榎ノ森の青鬼

装備の差（貧富の差）

新人は最新かつ最高級の装備、なかには同じ様な用途のものを2つも3つももっている。しかもこれは予備など不要なものなのだ。中堅はありあわせのもので間に合せている。電車賃が支払い能力の限界という感じで、生活の疲れが感じられる。これがなにを隠そう新人しごきの原動力となるのだ、新人諸君心せよ！

デリカシーの差

男性は個人装備に色々気を使い、それなりにオリジナリティーを発揮しようとした努力の跡が感じられる。

女性は概して金にものをいわせて買いまくった商品を値札のみ引きちぎって、ザックに押し込んで持って来たという感じである。

テント内でのスペースの差

新人はドッカーリ、中堅は長年狭い所に押し込められた経験というか後遺症により角に押しやられ！

行動面での差及び年令の差

中堅の張ったテントに新人が入り、中堅の張ったテントにも中堅が入る。共同装備は新人がバテないように中堅がより多く持つことは云うまでもない。BCの張り綱のチェックなどもちろん中堅の役目である。新人とは朝焼の銀嶺を見て感動し、夕焼を見てもの思うものなのか！新人は年上、中堅は年下。行動もスピーディーな者ほど早く始め、スローなものほど後からやりだす。ほんと逆なのになあ！世の中どこかおかしいよ。

スキー使用の問題

登りに楽をして下りに苦労する。こんなのありか！しかしそれなりに技術の向上はあったみたいだ。

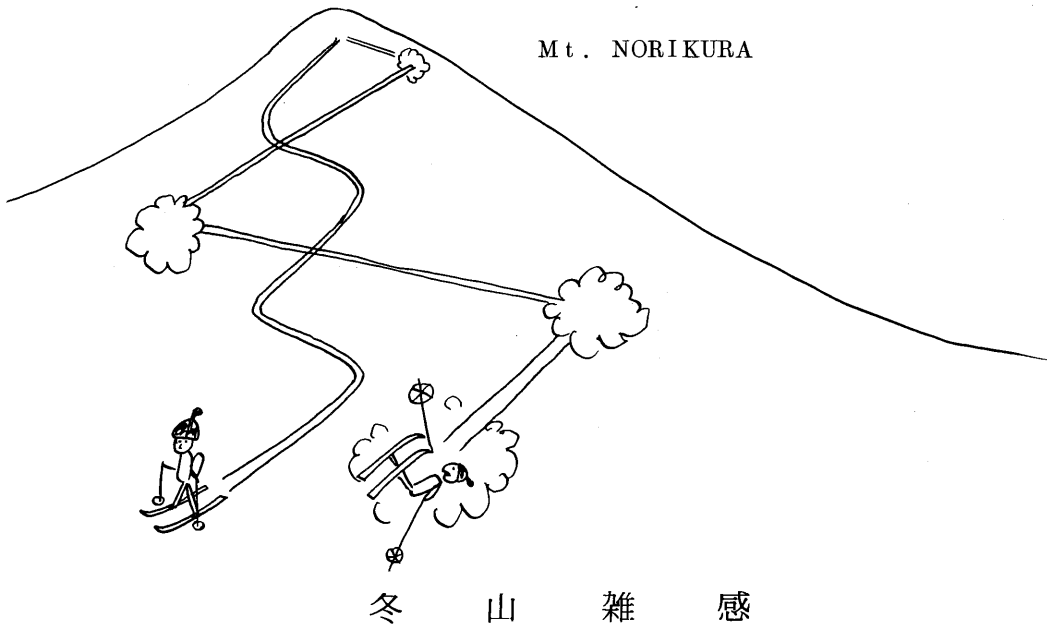
その他

- 新人曰く 榎池のタンネの森に鬼をみた
- 中堅曰く この恐しい合宿だけはやりたくなかった
- 新雪にフィーバするは滑るまえ
- 滑降後顔面のみがフィーバシ
- 乗鞍の斜面に画く尻の跡
- 乗鞍のシュプールでわかるくそ度胸

- 雪明りヘッドラなしにポンを打つ
- 夕暮のタンネンバウムに君思う。
- 転倒しボキと折れたる我がスキーうれし悲しやじっと足みる
- 馬の背を酒を求めて直滑降（新人）
- 樹池を美女をさがしてスラローム（中堅）
- ゲレンデを股を開きつボーゲンす（新人）
- ゲレンデの美女の間をスラローム（中堅）

総括

今回の合宿で特に感じたことは2つあります。1つはKACのうたい文句であるオールラウンドな山行の実践の限界についてである。会員あつての会と考え会で看板をおろすか、会員の能力のほうを何とかするかそれが問題である。とにかく現状は壁に突き当たっている。もう一つは、この合宿に参加したもの一人一人が、今回の合宿を各自の人生での一つのメモリーとして、長く心にとどめ、ふとあるとき雪をみて、又山を眺めては合宿での生活や参加メンバー一人一人を思い出してもらえらば、合宿は十分に意義があつたものと思う。



植原清明

久方ぶりで冬山合宿に参加させていただき、三浦リーダーはじめ参加者の方々にお礼申し上げます。

ところで、今回の冬山合宿は、冬山と呼ぶにはいささか物足らなかつた人もいたかもしれま

せんが、良きにつけ悪きにつけ今までのK・A・Cカラーと違った点があったことは確かでしょう。まず第一点としてスキーを用いたこと、第二点として参加者の半数近くが冬山が初めてであったこと、第三点として参加者の半数近くが女性であったこと、などが特徴点としてあげられます。

スキーを用いたことについては、スピード登山には有力な道具であるし、また、そうしたスピード登山あるいは尖鋭的登山を志向する人は是非ともスキー技術を身につけるべきでしょう。幸いにも三浦リーダーのスキー教室が開かれ、日々参加者の上達が目立ち、下山の時には初日と比べて皆かなり腕があがっていたようです。これからもゲレンデなどで基礎スキーをみっちり身につけ登山に多に利用すべきでしょう。

参加者の半数近くが冬山未経験者というのも将来のK・A・Cにとって楽しみの1つです。毎年冬山ともなると参加者中冬山未経験者というのは2・3人ですが、このように大多数の人が参加されたというのは、大きな成果であったことは確かです。

第8の女性の参加者が多かったという点ですが、会運営上最も問題になるのがこの点であろうとおもいます。しかし、性差云々について深刻に考えずに相互補充的に考えれば、かなり発展的な登山が出来るのではないのでしょうか。

最後に今回の合宿は多数の参加者があり楽しかったことは確かです。これからも多数の参加、高度な登山を目指し頑張ろうではありませんか。



個人山行

氷ノ山スキーツアー（ぶん回しコース）

大下 澄子

昭和54年1月14日～16日

メンバー 植原、上原、国沢、大川、大下

前の晩から急に雪が降って新雪がどっさり。車に乗っている間、近くの小さい山にも上の方に雪が……。寒い。でもスキーですぐ滑降だなんて思い気楽な気持ちで出発しました。駐車場のおじさんに「テント？元気だねえ。今、氷ノ山は入山禁止なんだけどなるべく無事に帰ってくるように。」と言われ、なるべくには驚いてしまいました。そんなもん帰って来るに決まってるやないのという気持ちでシールをつけて登り始めました。すぐシールで登高するにはきつすぎる所が来て、スキーを持ってロングスパッツだけで、ズボズボ足を雪の中に埋めてすべりながら登って行きます。千本杉の少し手前の平らな所にテントを張りました。下の方の町明かりが美しい。やはり兵庫県の小さな山だなあと思い雪がたくさんたくさんあるのに夜のなんと暖かったことか。

次の日は、朝、いよいよ今日はすべれる！と、嬉しい気分で出発しました。頂上に向かっていく途中、すごい樹氷にびっくり、みとれてしまう。頂上自体は、囲りは、何も見えずで別にそれ程の感激はなし。さあスキーでこの時、上から誰もスキーでこちらに来る人はいなくて、みんなが頂上で私達がすべっていくのを見送っていました。なんとなく恐ろしい感じ。ずっとこけながらすべっていく。すごく夢の世界をすべっている様なステキな所、尾根をすべりました。なんだか雪のない時にここは来たけど雪がつくとぜんぜん違った感じで雪がついている方が美しい。下りも登りもあり、変化に富んでいてこれはおもしろいという感じで満足。が、いくら行っても行ってもスキー場なんてぜんぜんまだという感じで、トラバースして行くうちにいつのまにか山の斜面に落ちていました。なんとすごいヤブコギ、ああこれは確かに道ではないと思いながら下りて行って、今度はスキーをはずして斜面をはい上がって尾根に出た。尾根にはトレースがありました。いっしょうけんめい歩いたけど日が暮れ、トレースがなくなった。ワカンで歩いたけど暗くてよくわからない。そしてテントを張りました。すごい風で夜中じゅうテントがバリバリとやかましい。朝も視界がきかず残念だけど、スキー持って歩き始めると標識が見え、嬉しくなり、足取りも軽くなり、上原さんの歩幅に合わせてワカンをぐっさりと雪の中に入れていっしょうけんめい歩きます。スキー場が見えた。なんか白いトンネルの中に入っていた様な気分。振り返ると、山が雪の中に埋まっているみたいでした。ああ私達はこの山々をずっと走って来たのかと思うと嬉しくなります。リフトの下を、誰も跡をつけてない所

をすべって行ってビールを飲みました。やっと白いトンネルから抜けた思い。

氷　　ノ　　山

国 沢 昭 美

14日、神戸を早朝に車で発ち、福定に着いたのがお昼だった。駐車場のおじさんから「出来たら無事に帰ってくるように」と言われ、全員苦笑。さっそく身仕度を整えて出発。男性2人は、小さなアタックザック。私達3人は、大きなザックをどっこいしょ。同じような装備を持ってどうしてこうも違うのか。考えさせられた。部落から少し登った所でスキーをつけ、登れる所まで登る。合宿の時のようなカタクリ雪ではなかったけれど、冬の陽ざしを受けキラキラと輝いて美しい。東尾根の避難小屋に出た所でティータイム。周囲を見渡せば、但馬の山波が幾重にも重なっている。行動している時には感じなかったけれど、じっとしていると寒さで体が震えてくる。今日の宿泊地の千本杉までもう一息。大休止の後、稜線に沿って進む。なだらかな登りが続いた後、急坂を越した所で今日の行程を終る。男性達は再び出発。私達は吊テントを張り、食事の用意。6時頃、男性達も戻って来て私達の横にツェルトを張る。御苦労様。夜、テントの外に出てみる。風は無く、空は満天の星。麗の村の灯が美しい。静かな夜である。明日のお天気を期待して就寝。

15日、7時出発。曇天。霧も出ている。スキーをつけ頂上まで登る。途中、巨大な樹氷がいくつもあり、霧のせいもあって幻想の世界を想わせた。頂上でも視界がきかない。ここからいよいよ下りである。滑るより転ぶ方が多くて起きるのに時間をとった感じだった。やっと氷ノ山越えの避難小屋に出て、お昼の行動食をつまむ。天気は少し回復し、氷ノ山の頂上が見えたり。今日下る予定の鉢伏のスキー場はまだ遙かに遠い。この日の午後の行程は、地獄の一丁目を歩いていたという感じであった。私にとっては初めての経験であるスキーをつけての藪コギは全神経を集中して、ひっしの思いだった。不安が心をよぎる。稜線に出られた時は本当にうれしくて思わず微笑んでいた。結局、日没までに下りきることが出来ず(余分の電池が無かった)無理をせずもう一泊することになったのは思わぬハプニングではあったけれど、別に不安は無くかえって賢明であったと思う。全員が吊テンにおさまり、ローソクの光の中で温いスープを分け合って飲んだ時は、張りつめていた緊張感が徐々にほぐれていくようだった。植原さんが「この山行は一生心に残るだろう」とっていった言葉が心にしみた。

今度の氷ノ山山行は、私にとっていくつかの反省点はあったけれど、合宿の実践山行であったと言えるでしょう。基本的な生活技術はもちろんのこと、その他の点でも合宿が生きていたと思います。

塩見岳敗退

星野辰也

昭和54年1月13日～15日 パーティー 幸内、星野、広澤、堀田

1月13日（小雪）伊那大島（9：15）——鹿塩（10：15）——河原島（11：30）——塩川小屋（13：30～13：50）——2,200m付近（18：30）

暖冬そして雪不足の今冬にあって、何故か今回の山行には多量の積雪に遭遇し、不覚にも頂上をものにすることが出来なかった。帰りに会った鹿塩のおばさん曰く、今年は正月以来2週間晴天で、我々が入山する前夜初めて吹雪となったとのことである。

飯田線はあいかわらずローテンポであり、しかも駅が多い。貧乏人の子沢山そのものだ。山間に人家が3～4戸あれば駅があるという感じで、長い列車ならば先頭と最後尾が2つの駅に跨りそうである。伊那大島よりタクシーで鹿塩まで入る。これより先は道路工事中で通行止である。第1回目の誤算。約1時間Lossした。小雪のチラツク中を一路塩川小屋へ、途中の大樺小屋は営業中であった。塩川小屋より足仕度をして沢沿いに右岸左岸と進む。期待に反して誰も水の中に落ちない。三伏への尾根の途中で夕方になる。途中に3～4張のテントがあったが我々はヘッドラを付けてなお進む。先には誰も行っていない。なんとか三伏峠小屋までと思うもそろそろ限界みたいだ。第2回目の誤算。仕方なしに斜面に快適なテント場を造る。今晚は予想に反して豪華な夕餉であった。嬉しい誤算。

1月14日（晴）起床（4：00）——BC（6：30）——三伏峠小屋（7：50～8：30）——コル（10：45）——三伏峠小屋（12：30）——BC（13：20）

BCより三伏峠小屋までは1時間程で、小屋には先人が6～7名いる。これで塩見までのラッセルから解放されるかと思うも、どうもあまり希望の持てそうな連中ではない。とにかく彼らを先行させてやれと思い大休止する。第3回目の誤算。

彼らの出発後、直に出発する。しかしあに凶らんやドジな連中で、小屋から500m程でルートファインディングを誤って三伏小屋の方へ向っているではないか！仕方なく我々が尾根沿いの道をラッセルすることとなった。これではなんにもならぬ。彼らはノコノコUターンして我々の後から来る始末です。積雪は三伏峠付近で1～1.5m程で新雪が60～70cmというところだ。30分程進んだがどうも久の様子がおかしい。何んと靴の中に多量の雪が入り込んでいるとのことだ！天は我々を見捨てたり。これで塩見岳は遠くなりにはけりだ。昨日の先輩の心やさしいアドバイスを無視したタタリじゃ。ここで仏の先輩が鬼に豹変する。しばらく久をおどかしてやろうと思うと、彼氏はまんまと計略に引っかかり、非常に狼狽する。久の不始末の最中に我々を抜いて行った先程のパーティーが戻って来る。一応行ける所まで行ってみることに

してコルまでは行ったが、新人2名の調子は極めて悪い。先輩2名は極めて快調である。このコントラストの中に今回の山行はあったと思う。経験だよ山チャン！

コルよりは先に行っても意味がないので、Uターンすることに決定する。新人は大喜び、我々はガックリ。今晚も又しても豪華な夕餉であった。明日も多分晴天だろう。

1月15日（晴）起床（5：00）——BC（7：45）——塩川小屋（9：15）
鹿塩（11：15）——伊那大島——豊橋——帰神

BCより一気に塩川小屋まで下る。鹿塩からはタクシーで伊那大島へ、着くとすぐ豊橋行きがある。伊那大島から豊橋までなんと4時間、その間車内販売もなにもない。我々は伊那谷の住民とともに国鉄に要求する、新幹線の売子を2～3人こちらへ廻してくれ！

本日はなんと久の成人式で記念すべき日である。日本の前途に一抹の不安を覚えるとともに我が身の年を感じた。そこで一大決心、豊橋へ着いたら断固うなぎを2人前食べよう！最後に、沢山お金のかかった山行でした。

仙 丈 岳

メンバー 萩本、国沢、広澤

2月10日 晴

戸台発（9：00）——丹溪山荘発（12：30）——大平小屋（15：00）
北沢峠（15：30）——一合目（16：30）

初めての女ばかりの冬山。それも2月の仙丈岳！無事に帰って来れたなんて、今から思うと夢のようです。2月9日、大阪駅の中央コンコースで顔を合わせた3人。ファイトみなぎるというよりも、とにかく行ってみようという気持だ。（堀田Qは後期試験の真最中で参加出来ませんでした）。いつものように満員のチクマ5号に乗り込む。装備の点検を少しやり、すぐに明日のことを考えて寝ようとしたが、場所がなく仮眠程度しか出来ないまま、タクシーで戸台に入る。昨年10月、駒ヶ岳からの帰りにここに来た時には、北沢から戸台まで、あまりに長い単調な道なので、バテル寸前にたどり着いた所だ。二度と来るまいと思っていたけれど、やはりなつかしくあの時の山行を思い出す。沢に下り、吊り橋のあたりで朝食を取る。食欲は旺盛だ。ひょっとして私達は厳冬期の仙丈岳ではなく、減糖期の仙丈岳を目指しているのではないかと思う程、2人の食欲はすごい。このあたりから雪道となるが、踏みかためられていて難なく歩ける。前方はるかに双児山が大きく谷あいの空をふさいでいる。鋸山を横ぎってあそ

こまで……。遠いなあ。一気に北沢峠まで走り込もうと、歩きに歩く。八丁坂を登り、大平小屋を通過し、やっと3時30分、北沢峠にたどりつく。明日の行動時間を少しでも短縮しようと仙丈岳を登り始めるが、一合目でダウン。急な樹林帯だが、3人用の吊り天を張るスペースはたくさんあった。夕食の後、少々緊張のおももちでシュラフにもぐり込む。

2月11日 快晴

一合目発(6:40)——五合目(9:00)——小仙丈岳(10:15)

仙丈岳(12:00)——小仙丈岳(14:00)——一合目着(15:40)

4時起床の予定が4時半になってしまい、出発が6時半を過ぎてしまった。昨夜半から、みぞれとも雪ともつかぬものが降り始め、明日はどうなるのかと不安な気持ちで迎えた2日目の朝、また明けやらぬうす暗い空をテントからのぞいて見ると、こうこうと輝く丸い月が1つ見える。そのうち鳥のさえずりなども聞こえ、空の青さが少しずつ増して来た。何とラッキーな事だろう。雪の状態も良く、ほとんどクラストしていない。さあ行こう。今日はベストをつくそうと顔を見合わせる。今から行く所は未熟な私達にとっては、まさに初めての体験だ。

5合目までは樹林帯の急登だが、トレースがしっかりとついているので楽だった。夏なら、菽沢小屋へのトラバースルートがあるのだが、見あたらなかった。眼前に小仙丈岳が大きく見え、その中腹が森林限界になっているのがよくわかる。小仙丈の登りはかなり急だが、何とかオーバーシューズだけで登りきる。ここからは尾根づたいになるのでアイゼンをつけ、慎重に歩き始める。風はきつく、時々突風が吹くけれど、耐えられる。左手に小仙丈沢に落ちているカールが見え始める。美しい。一点の岩もなく、白く、ゆるやかに切れ落ちている。まるでおさとうをふりかけたみたいに真白。右手には仙丈小屋が見える。尾根もだんだんせばまり、ここで落ちたら少しやばいと思う所がいっぱいある。アイゼンをひっかけないように、バランスをくずさないようにと、突風が吹いた時は立ち止まって待ち、風の呼吸の合い間をぬって歩く。展望はすばらしく、ふりかえり、ふりかえりながら足を進める。小さなピークをいくつか越え、12時、仙丈岳頂上に着く。またしても360°の展望。こんなにめぐまれてていいのかしらと、幸運の女神に心から感謝する。1時間程休憩の後、下山開始。来た道を下るのだから気分的には楽だが、登りよりも慎重に足を運ぶ。小仙丈の下りは、登って来た時よりかなり急に思え、ちょっとこわいなと思う。午後のやわらかい太陽の光を背に、見まもられながら一步一步下りてゆく。その度に心が満たされて行くように感じる。良かった、本当に無事で良かった。

私達の影がだんだん長くなり、ついには山の影ですっぽりおおわれてしまった頃、ペーステ

ントに着く。

2月12日 晴

一合目発(6:30)——丹溪山荘(7:45)——戸台着(10:30)

6時30分、テントを撤集し、北沢峠から丹溪へ向う。丹溪山荘ではたずねたい事があったのだが、おじさん不在のため、約束を果せなかった。この日も天気は晴。戸台に10時30分着。帰途につく。太陽にみまもられた山行だった。

記 萩本

我が故郷の山々(その1) 浅間山

星野辰也

浅間山は小生が幼小のころは非常に活発で、年に何度か爆発しその暗雲は広く天空を覆い、幼ない小生をしてこの世の終りとまた大自然の神秘さを感じさせたものでした。火山にも色々タイプがありますが、浅間山は桜島と同様に爆発により風下の関東方面に大量の火山灰を撒き散らします。火山灰が降るとあたり一面砂嵐のようになります。7年程前の噴火のときは付着性の高い砂が降りまして、衣服や頭は砂だらけになりました。同じ浅間山でも20年程前の噴火では、黒い粒々の直径2~3mmの砂が降り、テレビゲームなどなかった時代ですので、コウモリ傘を逆さまにして、この火山灰を集めて遊んだものでした。秋に噴火すると以後一年間は飯の中の石と戦うはめになります。

浅間山は群馬県では日光白根の次に標高が高く、又その北面には天明の大噴火(1783年)により出来た鬼押出しとその下に広がる広大な六里が原をもち、南面には軽井沢があります。夏の軽井沢はお嬢さん達で賑いますが、冬は訪れる人も少なく静かな山登りが出来ます。積雪はもともと少なく、又降雪も地熱で融ける為か他の山よりずっと楽に登れます。しかし頂上付近はアイスバーンになっており、滑落には十分注意する必要があります。なお降雪後ならば東面は頂上より峰の茶屋までのスキー滑降は可能です。(但し上級者のみ)

2月3日 中軽井沢(8:05)——峰ノ茶屋(8:30)——山頂(11:20~11:30)——牙山(12:20~12:30)——火山館(13:15)——浅間山荘(14:20)——小諸(16:35)——帰神

峰ノ茶屋付近で積雪は30cm程度であり、頂上でもほとんど変わらない。東面のルートは非

常に容易で滑落の心配もほとんどない。頂上からの眺めは素晴らしくなつかしの我家の近くの山々も確認できた。火口は風上の南面を廻ることにする。ガスや水蒸気で火口は100m程しか見えず、あまりいい気分ではない。火口を半周して西面の急斜面を下降することにしたが、アイスバーンで少々緊張する。転倒したらまずアウトというところだ。下りきったところの湯ノ平高原は静かでいいところだった。これより火山館、浅間山荘を過ぎ小諸までノンビリ歩いて下る。夜行日帰りの静かな冬の山旅であった。



我が故郷の山々（その2） 四阿山

星野辰也

四阿山の名を知る人は少なく、又登ったことのある人は非常に少ない。自分も四阿山の存在を知ったのは関西に来てからである。それまでは我が家から西を望むと浅間山と草津白根山の中間あたりに、須賀尾峠越しにやや鋭利な真白な山が見えたのを記憶しているだけである。小学校の頃のバス旅行で嬭恋村から鳥居峠を越えて上田市へ行ったときや、北軽井沢や新鹿沢、旧鹿沢へスキーに行ったときも浅間山の印象は強く残っているけれど、四阿山のはほとんどない。しかし四阿山を知らなくても、菅平を知る人はかなり多いと思う。特にスキー場としての菅平の歴史は古く、Old-Boy は根子岳よりのスキー滑降をけっこう楽しんだらしい。しかしながら、現在大糸線沿いの新設スキー場の出現により関西方面からのスキー客はほとんどないみたいである。しかしスキーツアーには絶好の場所で、特に根子岳の斜面は初心者向きであり素晴らしいダウンヒルを約束してくれる。

3月3日 上田駅—菅平(8:20)—北信牧場管理事務所(9:30)—根子岳
(12:00)—コル(14:10)—四阿山(16:20)—北信牧場
1,700m付近(18:20)

前日の50cmほどの降雪で最高のコンディションと思われたが、あまりの晴天で雪が少々腐りかけているのが気になる。スキー場では雪不足のためリフトを止め閉鎖の準備をしていたところへこの降雪で、あわてて再開の用意をしているとのことだ。そのためまだ一本のリフトも動いていない。静かなうちに出発する。北信牧場の柵沿いに一路根子岳を目指して進む。傾斜

はゆるく快適にシールが効く。バージンスノーの登高は最高である。滑降は技術により天国とも地獄ともなりうるのはいうまでもない。根子岳のピークでは、モンスターが出迎えてくれる。シャッター一枚でも寒くはない。四阿山とそれに続く上信国境の山々が美しい。時間があれば、万座温泉までのツアーも楽しいだろう。根子岳より四阿山へは一旦コルへ下降してから約300m程登らねばならぬ。根子岳の下りはちょっと岩稜でスキーをザックに付けて下る。ピッケルはもちろんアイゼンも馴れれば不用である。岩稜を過ればいよいよコルまで初滑りである。南斜面で雪が重いがそれも気にならぬ。しかしコルからは腰までのラッセルの急登である。どうにでもなれと思ったところ稜線に出た。スキーをデポして四阿山を往復することにしたが、あいかわらずのラッセルだ。稜線が狭い雪稜になったところに、ヒョッコリ祠が現われやっと頂上に到着である。足腰が登高とラッセルでぐらぐらになったところでいよいよスキー滑降である。しかも日は西に傾むき、背中の荷は重いとくればもうスタイルなどは気にしていられぬ。どうせ誰も見ていないのだから。夏道の右側の沢沿いに滑降することにする。あたりが暗くなったころ北信牧場の標高1,700m付近にて露営する。夜半小雪がチラチラ舞う。天女のラブレターかもしれぬ。おやすみなさい。

3月4日 テント場——大明神沢——牧場管理事務所——菅平——帰神

牧場の柵を越え、小さな沢を一つ越えてしばらく滑降する。傾斜はゆるく半分ぐらいは歩いたが、やがて大明神沢が現われた。沢まで滑りおりて、そこからスキーを担いで又しても柵を越え、ここから一気に管理事務所まで滑行する。広大な雪原を10km近くもシュプールが一本というのは気分がよい。

白 馬 岳 主 稜

メンバー 植原、三浦、星野

3月23日 北国にて大阪発

3月24日 信濃白馬駅タクシー——二股(8:10発)——猿倉(9:45着 11:00発)——白馬尻(12:15着 12:30発)——七峰付近(14:30泊)

3月25日 七峰付近(12:30発)——白馬尻(14:30)——猿倉(15:30着 16:10発)——二股(17:10)タクシー——岩岳スキー場——帰神

二つ玉低気圧があり、山は荒天とのこと、しかし、行くだけでも行けば得心がいくだろうと、列車に乗り込む。

白馬駅からは主稜の末端さえみえない。タクシーで入れるところまで入ってくれという二股までしか無理とのこと。途中細野からみる八方尾根は異常な暖冬のためロープウェーの駅周辺は全く雪がない。

主稜に取り付けばトレースはあることはあったが、悪天には悩まされた。夜中にはかなり風が吹き、降雪と地吹雪で天幕の半分近くが埋ってしまうという状況、しかたなく山頂は諦め、25日午後より下山する。

また機会があれば、雪辱戦をおこないたいものである。 (植原記)

石 鎚 山

メンバー 宮本、上原、田中、幸内

11月2日 神戸-松山

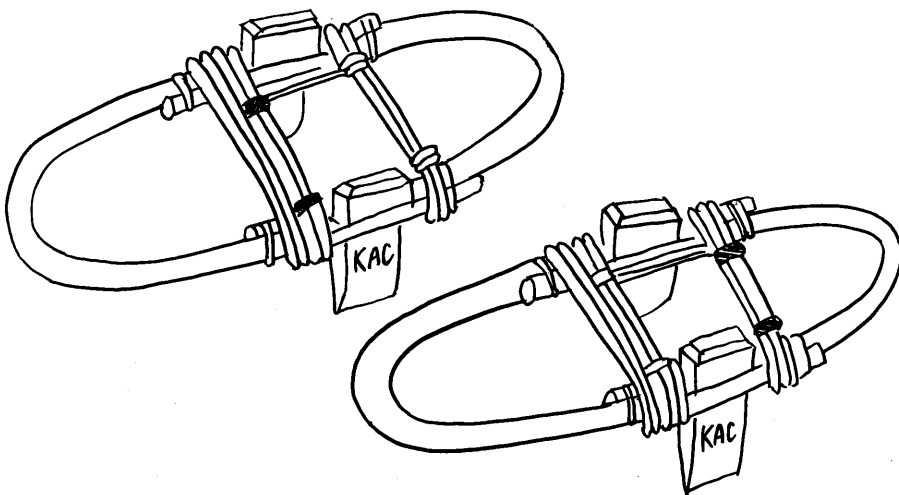
11月3日 松山-面河溪谷-播匠谷上部

11月4日 ドライブウェイ-土小屋-石鎚山頂上-土小屋-瓶ヶ森

11月5日 金比羅山

- 播匠谷でのたきびが大変楽しかった。夜遅くまで話をした。
- 上原君がたきびが大変印象に残ったようだ。

面河溪谷は美しくかった。播匠谷は難かしい所はなかった。 (幸内 記)



例 会 報 告

○印は当番を示します。

1月14～15日 個人山行

氷ノ山スキーツアー（メンバー 植原、上原、大川、国沢、大下）と塩見岳（メンバー 幸内、星野、堀田、広澤）の2つの山行が行われた。

1月20日 新年会

別途新年会報告に記載しております。

1月21日 市ヶ原～トウェンティクロス

メンバー ○萩本、三浦、堀田、山本、上原、大川、広澤、国沢

新年会の後、布引貯水池をへて、市ヶ原でテントをはる。大トラが1匹。その上、バットマンまでも出現、どうなっているのかしら……？ 翌朝、山本さんが来た時には皆まだシュラフの中。2日酔いというか、眠不足のまま、トウェンティクロスから摩耶山に向う。この道は人も少く静かで感じが良い。のんびりとそぞろ歩きにピッタリ。奥まや展望台で野球をする。

山本さんの足の回転数にびっくりさせられた例会でした。

1月28日 鉢伏山～別宮スキーツアー

メンバー ○星野、三浦、植原、大川、大下、国沢、萩本、上原

雪不足で鉢伏のスキー場ではあちこちに土が見えていたが、ツアーコースには雪もかなりあり十分に滑れた。新人も冬山合宿の成果でなんとか別宮まで無事辿り着く。国沢さんは大部山スキーが上達したみたいだ。帰りは両ウエハラ氏の車で楽々と帰る。

2月4日 ロックガーデンI T T

メンバー ○萩本、広澤、国沢、幸内、植原、内藤、矢木

比良山スキーツアーである所、雪不足のため中止。仙丈岳のトレーニングとして、ロックガーデンのアイゼンテクニック例会に変更して下さった。コンティニューアの歩き方や、確保の方法を教わる。まだまだ自分のものに出来ないかと、つくづく思う。でもアイゼンをつけて歩くのは大変おもしろい。芦屋に下り、檜の見える穂高岳（キッサ店）に入り、仙丈岳のことを色々話し合う。

2月11～12日 個人山行

女性軍による南ア仙丈岳往復の山行が行われた。(メンバー 萩本、国沢、広澤)

2月18日 堡壘岩RCT

メンバー 内藤、三浦、植原、星野、迫田、大川、国沢、萩本、大下、広澤、矢木
岩登りの後、ミュンヘンとスナックへ行き、カラオケで男心を歌うも、女心は聞かずじまいであった。

2月25日 蓬萊峡ITT

メンバー ○神田、上原、堀田、広澤、幸内、植原、国沢、迫田
百軒滝より蓬萊峡に例会を変更する。蓬萊峡では先週死亡事故があったとのことだ。

3月4日 西山谷～堡壘岩

メンバー ○幸内、野上①、星加、矢木、山本、上原、萩本、堀田、大川、国沢、
植原

3月10～11日 乗鞍岳スキーツアー(あなたは悪天候に生き残れるか?)

メンバー ○星野、内藤②、三浦、幸内、矢木、山本、大下
あいにくの天候で、位が原上部にてテント設営するも、コンクリートのような雪で雪洞は掘れず、小屋も閉鎖されていたため、全身びしょ濡れのまま夕暮れ迫る中をスキー場へUターンする。朝から晩まで雨とみぞれの中の行動であったため、スキー場上部の番人の兄ちゃん一人の食堂へ到着した時は全員ホットする。

翌日は冬型となりパリパリのアイスバーンのスキー場を鈴蘭へと下降する。再来を期して初めて姿を見せた乗鞍岳に別れを告げる。それにしても技術レベルに差があり過ぎるスキーツアーはなかなか難かしいものだ。

3月18日 不動岩RCT

メンバー ○幸内、広澤、大川、迫田、矢木、星野、植原
あまりスッキリしない天気だったが、岩場は大混雑であった。帰りにS氏のチョットしたミスでみな思わぬ旅行をすることになった。時間も岩登り同様三点確保ならぬ三人確認の必要性を感じた次第である。

3月25日 百丈岩RCT

メンバー ○萩本、幸内、神田、堀田、上原、山本、広澤

当番でありながら、急に前後から参加出来なくなり、国鉄宝塚駅で不安な気持ちで待っておられた方々には、本当に申し訳なく思っております。百丈岩は初めてです。むつかしいから新人が行っても登る所がないと言われて来ましたが、わりとルートがあるのではないかと思います。どんどん、これからは例会に組み入れようと思います。

午後からは、来週日曜日にかけての但馬の山グループと、五竜・鹿島槍グループに分かれてそれぞれの山行計画を話し合う。おたがいに、うまく行けばと心から願う。

4月1日 高御位山R・C・T

メンバー ○植原、迫田、星加、矢木、星野

午前日、高御位山山頂の岩場にてR・C・T・午後より鹿島神社裏手の岩場へ移動しR・C・Tこの高御位山系はフレッシュな岩場が多く今後のK・A・Cの課題として大いにチャレンジすべきでしょう。

***** 編 集 後 記 *****

今年の暖冬は異常なものだった。もうすぐ春、何となく、山ヤ、スキーヤーにとっては、物足りなさで冬が終わってしまったという感じの方も多いただろう。しかし、スキーヤーと違って山ヤには垂直の散歩があるではないか。(K・U)

今回は原稿のほとんどを無理矢理新人に書いてもらったが、やはりOB、中堅の方々にもっと書いて欲しかったと思います。新人のみではどうしてもスキー面的になってしまい、KACの多彩な面が出せません。御多忙とは思いますが、単なる山行記録にとどめるのではなく、かつて登られた忘れえぬ山々のエピソードなどを連絡願います。(T・H)

例会当番へ！ 自分の当番の例会報告も出来ない様な例会でどうする。一回の例会とて参加し、ましてや当番ならば感ずるところが必ずあるはずだ。書くのが面倒ならばTELでもOKである故必ず連絡して欲しい。

原稿提出先 〒655 神戸市垂水区塩屋町平尾19 川重塩屋寮

TEL 078(751)2530又は3045 星野辰也

内藤さんより雑誌“山と溪谷”を沢山いただいております。現在、上原さんが保管中ですので、バックナンバー御希望の方は上原さんへ連絡してください。

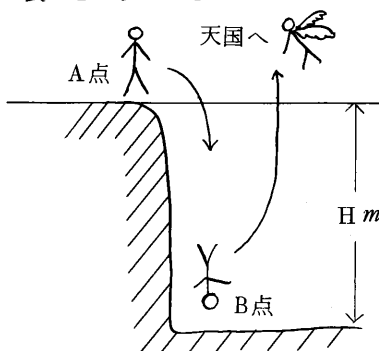
〒652 神戸市兵庫区東柳原町3の10 マツダ寮内 上原正記
TEL 078-671-5266

先に都合により退会された野島嬢よりたよりがありました。今後もマイペースで山登りを続けられるそうです。

※※※ (岩登り・その墜落の恐怖) ※※※

初等力学を用いて岩壁での墜落の恐怖を日常体験している自動車事故と比較してみる。なお墜落のスピードは、落石のスピードと同じなので落石の恐怖にも応用可能である。

図に示す通りA地点よりB地点に墜落した場合、B地点にて岩に激突するスピードは下記の表のとおりである。



高さ H	落下時間 T	落下速度 V
10 m	1.43 秒	14 m/S (50.4 km/H)
20 m	2.02 秒	19.6 m/S (70.5 km/H)
40 m	2.86 秒	28 m/S (101 km/H)
100 m	4.52 秒	44.2 m/S (159 km/H)
200 m	6.4 秒	62.6 m/S (225 km/H)

上記表に示すとうり、10 mの墜落でも状態によってはアウトになる可能性が大であり、ましてや40 mに到っては、木にでも引っかからぬ限り絶望である。40 m以上は確実なビレーで防げる場合が多い。しかし落石はこのスピードであなたを狙っている。用心あれ！

$$T = \sqrt{2H/g} \quad \text{時間を求める式} \quad g: \text{重力加速度 } 9.8 \text{ m/S}^2$$

$$V = gT = \sqrt{2gH} \quad \text{速度を求める式}$$

なおA点でのポテンシャルエネルギーは、B点で大半を頭蓋骨の破壊に費いやされる。